

水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年七月														
15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
土璃 光雲2 癒香	一駄歩	大越 佳月 山菜		素風		暦文 直子 一駄歩 ありぎりす あらか	佳月 ヨネヤマ 凡士 破れ蓮 鶴城 みづる	ひろし 蝸牛 彩香 きいち ひろ志 鶴城 光雲2 順一 破れ蓮 ひつじ	あらか	ありぎ りす 絵夢	霜里	一駄歩 あらか	俳爺	
夏氷玻璃の器はうすみどり	冷奴どこより箸を入れやうか	失言はおほかた本音青鬼灯	虎が雨輪ゴムの切れること多し	山頭火頭れさうな青嶺かな	夏の日や俯瞰の光こどもプール	小さくなる森膨らます蟬しぐれ	名は知らね花を残して草むしり	白日傘傾げて陰を分かち合ふ	友部活我は補習の夏休み	傘立てに杖と日傘の行儀よく	驕れりと謂はれし今宵冷奴	遅遅として進まぬパズル梅雨に入る	車椅子押す手急かさる夕立かな	紫陽花に浮気の現場見られたり
大越 マーガ レット	岩本 卓夫	荒一 葉	網野 月を	破れ 蓮	高原 ひろし	衛	あり ぎり す	松田 素風	宇田 靖之	新井 のり子	瞳人	檜鼻 ことは	森 佳月	ヨネヤ マカ ローリ ング

水明インターネット句会（選句・選評）																令和七年七月
30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16		
		ことは 山菜 絵夢 幹子	一葉 風子		直子	直子 梗舟	梗舟		彩香 しーしー 月を	破れ蓮 霜里 かれん	ヨネヤマ 喜夫 癒香	霜里	土璃	癒香		
紹の女やバービーを抱き現るる	耳鳴りを心配すれば蟬の声	白南風や開いて閉じて象の耳 南風にゆつくりと耳を動かす象の様子がユーモラスです。白南風のなかの象さん、気持ちよさそう！耳の開閉は、体温を下げるためとか。季語が効果的。心地よい風に、象もゆつたりしているのではありませんか。	桜桃忌今朝の次男の薄化粧 最近の男の化粧も流行、季語「桜桃忌」との取り合わせで、次男の人の柄を想像するのが楽しい。次男の薄化粧に太宰治の生涯を重ねる母親の不安。	飲み干してグラスの麦茶うまきかな	夏椿分かって欲しい痛む足 夏椿なら分かってくれそうですね。	取巻きの多き弁士や街の蠅 ちよつぱり皮肉がきいてますね。昨今の選挙がそうですね。	等間隔の恋鴨川に熱帯夜 情景が鮮明に浮かびます。	ふらり来て足元よぎる夏の蝶	日盛りをバックしますとダンプカー 切取り方がうまい！「バックします」の女性の合成音声がいつまでも響きます。暑いのに忙しく働くくるま。車両がバックする際の警告音でありましょう、「日盛り」がリアルです。	冷房の名残を断ちて外仕事 外仕事の厳しさが伝わる。「よしっ」という声が聞こえてきます。冷房の中から仕方なく外の仕事に出ていく気持ちがよく出ている。	石楠花の宿す孤独を射る炎暑 宿す孤独の措辞が良い。炎天下の中、宿す孤独は石楠花の孤高の美しさを際立たせています。なんとも深い句。	散り敷ける花に花びら百日紅 色は優しいのにタフな花です。	十葉の埋み尽くすや木戸の跡 そこはかといひ侘しさがよいと思います。	鳩居堂へ伽羅の染み入る藍浴衣 伽羅の香と藍の色の表現が良い。		
一駄歩	青木鶴城	河野凡士	神谷たくみ	いさむ	和田イチ子	秋谷風舎	俳爺	鶴岡ひつじ	くるみ	安田蝸牛	光雲2	ひろ志	立野音思	新 暦文		

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年七月
		くるみ	たくみ 風子				のり子 素風 ヨネヤマ 絵夢					ことは 幹子		暦文	
お地蔵と眺むるゆやけ鬼燵	カーブ攻めダブルクラッチ夏の山	止り木でオンザロックを単帯 シヤレていて魅力的な作品、単帯が絶妙。	AIよ考えすぎださくらんぼ AIは真面目生真面目くそ真面目。AIよ義理と人情が大事だよ。	草刈機せわしき音へ香は立ちぬ	白雨打つ過ぎしこと皆流すごと	空青し梅雨明け告ぐるアナの声	風孕みにはかに重き白日傘 日傘の内側の自然を表現している。風を孕んだ日傘の様が見える。風の重さを感じたところが素敵です。風の重さを象徴的に上手く表現している。	目玉焼き陽炎ゆるるアスファルト	白樺を行く鰐広の夏帽子	夕風の空気まとわせウォーキング	アスリート影も競ふや夏つばめ	人絶えてノウゼンカズラ揺るる家 ノウゼンカズラの揺れは記憶の揺らぎでもあるのでしょうか。花を大切に育て、暮らした日々もいつかはこうになるのでしょうか。胸にジーンとききます。	雷門抜け賑わひの鬼灯市	鬼怒川の崩し宿に月見草 昔栄えた鬼怒川の廃墟の旅館に月見草の生命力。	
山川 充	平野 楽	染谷 風子	小林 土璃	岩清水 彩香	霜 里	総 太 郎	みづる	良 月	龍野ひろし	しーしー	絵 夢	大束 暮 風	かれん	渋谷きいち	

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年七月
総太郎				瞳人 梗舟			瞳人 田猫	月を かれん						たくみ	
猛暑かな蝉もなき止む正午前	容赦なく手に染みきざむ晩夏光	紫陽花や浮気心を見透かされ	隣人の佳からぬ噂南風	今日もまた妻の遺影と冷酒と そうやって一ト目、一ト目を重ねゆく、やや先の吾が日々を見るように。お盆の時期ですね。	川涼し避けられぬのは水溜まり	プール開き児童の声を輝かせ	此の国に麒麟はまだか青嵐 恥もなきイシバの姿を見せられるにつけ、麒麟はぬぬか。季語が絶妙。私が投票した人たちが麒麟となることを願う。	熱中症のにはとり今日も空を飛ぶ 鶏の擬人化か、もしくは本当に熱中症に罹った鶏なのか、鶏も熱中症になるんですね？熱中症は人間だけじゃなく、にはとりも耐えられない。いほどかもしれない。	戻り梅雨首を傾げるてる坊主	繁茂せる亡母の庭や蝉時雨	焼け肌に冷ます海の香夜の秋	三十五度でんでん虫はかくれんぼ	絵手紙の風鈴揺るる風の流色（いろ）	ほうたるや養子話を切り出され 恋や死を避けての以外な題材。蛍の可能性はまだまだ。	
宇田靖之	新井のり子	ヨネヤマカ ローリング	檜鼻ことは	森 佳月	石川順一	佐藤幹子	石関六弦	森下山菜	岡崎梗舟	横井あらか	癒香	雪待月田猫	持永喜夫	石井直子	

75			74			73			72			71			70			69			68			67			66			65			64			63			62			61			水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年七月
			素風						展平			総太郎			のり子 凡士			ひろ 俳翁し きいち			ことは 佳月 瞳人 月を									蝸牛			蝸牛			土璃 みづる			俳翁 喜夫						
浮かびくる水占（みづうら）みくじ貴船			山路来て手底に汲む岩清水 冽な岩清水を掬う姿が目には浮かぶ。			快晴の山暮れてなほ川床涼み			二十ほど若返りたる衣更 私は10歳くらいしか。			手を振れば待つ路線バス芋の花			よく笑ふ前歯は二本夕涼み 今は亡き隣人を思い出す。元氣な生身魂ですね。			幼子の尻ころがるや宮相撲 尻ころがるに宮相撲のユーモラスと歓声が見えてくる。尻転がるの措辞がよい。			似たものとなりし歳月ところてん 「似てきた」と気づけるのは、長い時間とともにしたからこそ。似たもの夫婦ですか。穏やかな二人の歳月を感じます。その積み重ね、それがしあわせと気づくのも、また、好しじやあないですか。「似たもの」は友人か、同僚か、はたまた夫婦か。			少しの間の杖の通院独り暑し			瓜もみや今日は亡母の誕生日			辛口の酒を酌まれて暑氣払ふ 辛口の冷酒と季語がマッチする。			西日受く部屋のほめきを憂俱せり 「ほめきを憂俱せり」の措辞がよい。			久方の郷の目覚し閑古鳥 カツコウの鳴声で目が覚めるとは、うらやましい。帰郷してカツコウの声で目覚める朝の清々しさが実感される。			吸飲みに麦茶を淹れて妻帰る 臥所から心配りの妻を見送る夫の心情が窺える。吸飲みが心に染みます、こんな思いやりのある夫婦になれたならとの願望あり、でも無理かな。			昼寝覚め蛍雪時代を夢見して			
光雲2			安田蝸牛			新暦文			ひろ志			立野音思			荒一葉			大越 マーガレット			岩本卓夫			高原ひろし			網野月を			破れ蓮			松田素風			衛			ありぎりす			瞳人			

水明インターネット句会（選句・選評）																令和七年七月
90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76		
	展平		ひろ志			くるみ	暮風	ひろし 暮風 一葉 かれん 彩香 くるみ 暦文 たくみ ありぎりす	展平			田猫	一葉 鶴城			
わが季節到来せりと夾竹桃	ハマナスが砂に埋もれまいと咲く 砂丘のハマナス、埋もれまいとしていますね。	朝顔のカーテンの呼吸（いき）居間冷ます 絵夢	ほうほうの声に飛沫の鵜飼かな かがり火の明かりと鵜匠の「ほう、ほう」という声が夜の川面を渡る。長良川の幻想的な光景を味わいます。	野外フェス風に乗りゆく避暑の夜 かれん	江戸弁を聴きに今夜は朝顔市 渋谷きいち	もう石になりたる地蔵木下闇 長い時の経過を感じました。 神谷たくみ	炎天に澄み渡る声木遣唄 青木鶴城	せせらぎは風湧くところ糸とんぼ 類想句がありそうだが、「水音」「風の囁き」「トンボの羽音」が涼しげである。詩的な切取りに平仮名の中の「風」と「糸」が美しく浮かび上がる。季語が効いていると思います。風湧くところの表現が上手い。せせらぎ、風、糸とんぼ付き過ぎの感があります。素直さに惹かれます。涼しさが表現されているし、季語の付き合いもいい。水の音が聞こえてきそうな感じで糸とんぼが涼し気です。	真つ白な備蓄の米や秋近し まもなく新米が！ 秋谷風舎	飛び跳ねる鯉鯉かすめオニヤンマ いさむ	紫陽花のしおれ雨待つ降れ降れよ 和田イチ子	開演を待ちみるロビー花氷 季語に託したわくわく感が伝わる句。よい休日を。 くるみ	すれ違ふ男日傘やゼブラゾーン 男も日傘をさす時代。ふとすれ違った男が気になる。人との出会いの傍さに下五の「ゼブラゾーン」が効いている。男日傘とゼブラゾーンの取り合わせが良い。 俳爺	海霧深し高層ビルのレストラン 鶴岡ひつじ		

水明インターネット句会（選句・選評）															
令和七年七月															
105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	
		山菜	ひつじ 喜夫 きいち 幹子	風子	大越		ひつじ 順一	大越 ひろ志		みづる	しーしー 暮風			凡士	
鮎鍋暖簾の文字に誘われて	絵手紙に吾と朝顔生きてなお	崩れゆく大輪花火海鏡 海の鏡に映って華やか！	蝉しぐれ。ピアニツシモの晩夏かな ピアニツシモは秋の来る気配か？素敵な表現と思いました。今年は空 梅雨で蝉が土から出てこれず、少なかつたそうです。ピアニツシモは 地球環境変化の兆しかも。ピアニツシモが良い。蝉しぐれの様子を、 ピアニツシモと表現されたのは巧みです。	きつと愛たぶん愛かも水中花 水中花は虚の花、この愛も何となく不安。	生き物の飛ぶよ跳ねるよ田水沸く 蛙や蜻蛉まさに生き物と自然のハーモニー。	喧噪に気配けしたり蟪蛄や	白雨去り鯉の尾の打つ水の音 雨野跡の爽やかさが表れているのが良いと思いました。水音が聞こえ そう。白雨が去り鯉の尾の水を打つ音を見た。音を見たと言うのは ちよつと可笑しいかもしれないませんが、それほど鯉の尾と、水を打つ音 が一体化していたのではないかと私は考えました。	虚と実の身の上話夏の月 ちよとは盛ったほうが面白いですよね。身の上話は、粉飾されます ねえ。	紋違へ田ごと田ごとの青田波	起きられぬ病室の窓夏雲よ 病室のベッドから見える真つ白な夏雲で梅雨明けを知り、たとえ暑く ても青空の下で思い切り季節を感じたいとの思いが切ない。	指先で灼くる鉄棒そつと触れ 俳句でしか言えない人がいて。	沼風の運ぶ飛沫や夏初	吹き抜けを豆の木伸びる雲の峰 ジャックと豆の木を思い出します。		
岡崎梗舟	持永喜夫	癒香	雪待月田猫	平野楽	石井直子	山川充	岩清水彩香	染谷風子	小林土璃	総太郎	霜里	龍野ひろし	みづる	良月	

120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年七月
										のり子		総太郎 光雲2 しーしー	田猫	順一	
										風薫る職員室の開け放ち 夏休みの職員室の1コマ、なんとも懐かしい。	湯を動き湯の皺作る極暑かな	短夜のモカの香りの沁みる朝 朝涼しいうちにコーヒーをドリップする姿が浮かんできます。「モカ」が短くてうまく使ってますね。	蝉の死やラジオざざざと歌う音 上五と「ざざざ」が響きあう、引き込まれる句。	大噴水曲はリストの狂詩曲 リストの狂詩曲が流れて来るとは粋な計らいですね。きつと噴水も、カラフルな豪勢なものだったのかもしれない。	
										石関六弦	石川順一	佐藤幹子	横井あらか	森下山菜	